

2025年度 入学試験 **国語** 問題冊子

早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

注 意 事 項

1. 問題は、本冊子の p. 1～p. 30 となります。
2. 解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
3. 「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
4. 監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
6. 解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
7. 「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
8. 問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。
9. 文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさと・濃く）記しなさい。
字画（文字を構成する点や線）は、省略せずに楷書で記すこと。
認識できない乱雑な文字は、不正解もしくは減点の対象となります。

受験番号							氏名

A large grid of asterisks (*) arranged in a pattern. The grid is 20 rows high and 100 columns wide. The asterisks are arranged in a regular grid, with one asterisk per cell. The pattern is a simple, repeating grid of asterisks.

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自然、社会、時間、心というように世界のありとあらゆる事象は一九世紀から二〇世紀にかけて客観的にとらえられるものとなっていった。そこから客観的な事象こそが真理であるという現代人の多くが共有する発想が生まれる。ところが客観性が支配する世界はたかだか二〇〇年弱の歴史しか持たない。〔中略〕

客観的なデータこそが正しいというのは今ではあたりまえの感覚だが、歴史のなかで徐々に生まれた発想だ。当時、科学の研究成果を公共の場で保証する要請がでてきたときにモデルとなったのが裁判による評決だったという。一七世紀のロンドン王立協会では、実験に、権威のある学者が立ち会い、しんぴよう信憑性を証言することで真理を判断していた。

「権威のある」古典の記述に反する個人の体験は単なる逸脱と捉えられ、「真の経験」とは認められない。実験室における個人的経験を公共的知識へと変換することが、ヨーロッパ各国のアカデミーの共通課題となったのも、そのためである。「裁判の〔証言を模した〕レトリック」は、まさにこの問題に対する解決策だったのである。

近代的な意味での科学的探究が始まった一七世紀は、時間に余^aユウがある貴族たちが科学の中心だった。キリスト教会が強かった当時、聖書およびアリストテレスの教えが「古典」として絶対的な権威を持っていた。ところが近代の科学的探究は、（地動説を唱えたコペルニクスやガリレオの例を始めとして）教会が認定する真理とは相容れない結果をもたらすことになる。このとき神の権威とは異なる権威が必要とされるようになる。一七世紀には、まず証言者の権威によって真理が保証された。「人間の証言」を「事物の証拠」よりも優先する」のだ。

しかしながら、次第に権威ある学者による証言に代わって、機器による測定によって真理が決められるようになる。ガリレ

オがピサの斜塔から重さの異なる大小の球体を落下させて同時に着地することを示し、「気体の体積は圧力と反比例する」というボイルの法則で知られるロバート・ボイルが空気ポンプ実験を行うというように、実験による客観性が生まれた。次第に目撃者の証言からは独立して、「客観的」に真理が成立することになる。

その後、実験室が多くの大学で設置されるようになった一九世紀にいたる歴史のなかで、¹ 測定が重視されるようになる。客観性の大事な要素であるこの測定についてももう少し歴史を振り返ってみよう。

二〇一四年に、動物細胞をある種の酸に浸けることによって、あらゆる細胞へと分化しうる万能細胞になるという「発見」がなされた。^A、それを証明した論文は画像の修整や捏造^{ねつぞう}が明らかになり、論文が撤回された。このSTAP細胞事件は画像が客観性を保証するという社会的な合意を逆手に取るものだったといえるだろう。

科学は画像を多数用いてきた。顕微鏡を用いた細菌学や、fMRIのような大規模な機械によって臓器を撮影する医学や神経科学が^bケン^{ケン}著な例であろう。つまり現在でも画像は客観性を保証する手段となっている。同時にこの客観性は、写真を加工することや、都合のよい実験結果だけをデータとして採用することで比較的容易に結果をゆがめることができる。

美しいデッサンを多数残した一八世紀から一九世紀前半までの自然科学は、実は目の前にあるサンプルを忠実に模写していたわけではなく、理想形を描いていたという。^B 客観性を求めたのではなく、自然の本性の定着をめざしてきたのだと、

先ほど取り上げたダストンとギャリソンは論じている。偶然による誤差や奇形に満ちた具体的自然ではなく、神が創造した自然が表すはずの美しい真実 truth、理念を描くことが求められた。現代ならば「捏造」と言われる理想的な画像こそが、真理を表現するのだ。

スウェーデンの博物学者カール・リンネが作成した植物図鑑も「客観的とはいいいがたい」ものだったという。正確にサンプルを模写するのではなく、特徴を強調して草花の一般的な姿を提示するのだ。² リンネや啓蒙期の学者たちが依拠した規範は、客観性ではなく本性「自然」への忠誠 (truth to nature) だったのである。科学者とは、神が創造した自然の理念へと直

観的に一気に到達する人物のことだった。この直観を一八世紀の学者は図像化しているのだ。

神の権威が弱くなるなか、一八世紀後半の啓蒙思想^(注1)やフランス革命以降の西欧社会において、学問の真理は神が保証するものではなく、自然そのものの現れにおいて確かめられる必要が出てきた。自然の理念を描くのではなく、自然そのものを客観的に描こうとするのだ。こうして客観性こそが真理であるという通念が生まれることになる。一九世紀半ばになると、「客観的な」図像をどのように作成するのかが、大きな課題になってくる。

3 機械による客観的な測定はこの文脈のなかで生まれたものである。 社会学者の松村一志は測定をおおむね時代順に並べて六段階に分けて整理している。

- ① 感覚の段階……身体感覚によって確認する
- ② 視覚化の段階……物質変化を目視する
- ③ 数量化の段階……物質変化に目盛りを与える
- ④ 誤差理論の段階……「複回数測定して」測定精度を誤差理論によって分析する
- ⑤ 指示・記録計器の段階……物質変化が目盛り上の指針の動きに変換され、記録される
- ⑥ デジタル化の段階……数量をデジタル表示する

①から③は、判定者が重要になるから、証言によって結果を保証する必要がある。しかし④以降は機械が自動的に計測することになり、測定結果は研究者の手を離れて自立していく。つまり「より客観的」になる。

ただし、機械があったから客観性が追求されたわけではなく、むしろ客観性の追求への意志が先にあったようだ。

C

一九世紀に発展しつつあった写真という新技術は、偽造・修復可能だ。写真技術ゆえに客観性が重視されるようになったわ

けではなく、機械的な客観性を目指す要請のほうが先に立ち、写真はその要請のために重宝されたのだ。

客観性とは、人の目というあいまいなものに「邪魔されずに見る」ことを指すようになる。D 機械的客観性が成立する。写真という機械を手にしたことによつて「人間による判断から解放された表象を手にすることができ」と信じられたのである。自然は神からも人間からも切り離された、それ自体で成り立つリアリティとなる。自然を人間から切り離して正確に認識しようとする意志が、主観性への排除と客観性への ^c シュウ念を生んだのだ。

4

一九世紀末から客観性はさらなる段階へと進む。測定や記録された図像の正確さに依拠した機械的客観性は、法則、記号をもちいた論理構造に主役の座を譲る。

たとえば、ゴットロープ・フレーゲに始まる一九世紀末からの現代数学の進 ^d テンも、人間の操作とは無関係に成立している論理的な関係のなかに数学の基礎を求めるようになっていった。あるいは物理学においてはマックスウェル方程式のような構造が科学的な実在とみなされるようになった。測定ではなく方程式や論理式が客観性となる、ということだ。言い換えると、「それは何か？」ではなく「事象と事象がどういう関係でつながっているのか？」に焦点が移るということである。

一九世紀末から二〇世紀初頭に活躍した物理学者のアンリ・ポアンカレは次のように語っている。

「科学の客観的価値とは何か」と問うとき、その意味は「科学はものごとの本当の性質を教えてくれるか」ということではない。「科学はものごとの本当の関連を教えてくれるか」ということを意味する。

個々の対象ではなく対象間の法則こそが客観性だとみなされるようになるのだ。法則性が重視されることで、人間の関与は一層抹消される。さらには法則の方程式にはどんな数値が代入されてもよいわけだから、個別の対象も抹消される。数式と数値だけが残るのだ。

法則性の追求によって、あらゆる学問の成果は研究者の意識を離れて、客観的に保証されるようになる。図像も機械による測定も離れて、論理的な整合性こそが、自然の科学的真理を言い当てると考えられるようになるからだ。

論理的な構造が支配する完全な客観性の世界が自然科学において実現したとき、自然は実はそのままの姿で現れることをやめ、数値と式へと置き換えられてしまう。自然を探究したはずの自然科学は、自然が持つリアルな質感を手放すようになるだろう。雨や風の音や匂い、草木が ^e ハン茂していく生命力は消えていく（もちろん事象のリアリティにこだわりつづける生物学者・生態学者もいるだろうが）。客観性の探究において、自然そのものは科学者の手からすり抜け、数学化された自然が科学者の手に残ったのだ。

（村上靖彦『客観性の落とし穴』による）

（注） 1 啓蒙思想——聖書や神学といった従来の権威を離れ、理性（悟性）による知によって世界を把握しようとする思想運動。

2 マックスウェル方程式——ジェームズ・クラーク・マックスウェルによって、数学的形式として整理された電磁力に関する法則。

問一 二重線部 a 「(余) ユウ」・ b 「ケン(著)」・ c 「シュウ(念)」・ d 「(進) テン」・ e 「ハン(茂)」について、同じ漢字を用いるものとして正しいものを、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 余ユウ

ア ユウ柔不断な性格が彼の短所である。
 イ 環境問題の観点から未来をユウ慮している。
 ウ 国際関係を維持すべく、首相が各国を外ユウする。
 エ 幼い頃にユウ福な生活をしていた習慣が忘れられない。
 オ 支払期日までにはわずかなユウ予がある。

b ケン著

ア 彼の自己ケン示欲の強さが周囲を不快にする。
 イ このプロジェクトの成功は彼女の双ケンにかかっている。
 ウ 今回のテストに向けてケン命に勉強する。
 エ ある犯罪のケン疑がかけられた人物と接触する。
 オ 彼は野球チームの監督と選手をケン任している。

c シュウ念

ア トラックに乗って農産物をシュウ荷する。
 イ 大学のゼミで地域に固有のシュウ俗を研究する。
 ウ 友人の結婚に際してごシュウ儀を渡す。
 エ 干支には十二年のシュウ期がある。
 オ 彼女はピアノのレッスンにシュウ心している。

d
進テン

ア 家族と生き別れてテン涯孤独の身となる。
イ 将来のテン望について夜通し語り合う。
ウ 小論文のテン削指導を先生にお願いする。
エ 遠足先でテン呼を取る。
オ 新たな職業にテン身して大成功する。

e
ハン茂

ア 未成年者は保護者の同ハンが必要である。
イ 文化ホールは音のハン響が優れている。
ウ 台風によって河川がハン濫している。
エ 後輩の模ハンとなる姿勢で学校生活を過ごす。
オ 国家のハン栄を願う式典に参加する。

問二 空欄 A く D を補うのに最も適当な言葉の組み合わせを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	A	そして	B	しかし	C	結局	D	それゆえ
イ	A	また	B	それゆえ	C	だが	D	従って
ウ	A	そこで	B	たとえば	C	つまり	D	あるいは
エ	A	しかし	B	つまり	C	たとえば	D	こうして
オ	A	だが	B	なぜなら	C	そして	D	つまり

問三 傍線部 1「測定が重視されるようになる」とあるが、ここに至るまでの経緯はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十七世紀に科学的探究が始まったが、古典的権威が絶対的な力をもっていたために、実験に立ち会った科学者が古典的権威に追隨する証言を行うようになってしまったため、次第に人間による証言を避け、機械による測定によって真理が成立するようになっていった。

イ 十七世紀に科学的探究が始まったが、従来の絶対的権威に対抗する、新たな権威が必要とされたため、当初は実績のある学者が研究成果の信憑性を保証したが、次第にそれを離れて、機械による測定によって真理が成立するようになっていった。

ウ 十七世紀に科学的探究が始まったが、個人としての実験結果を社会全体としての共有財産とするために、当初は複数の人間が立ち会うことでその信憑性を保証していたが、次第に人間そのものへの疑念が社会全体で高まっていき、機械による測定によって真理が成立するようになっていった。

エ 十七世紀に科学的探究が始まったが、当初は精度の低い実験器具を経験豊富な科学者が扱うことで信頼性を補っていたが、次第に精度の高い実験器具が発明されるにつれて、科学者の経験に負う必要性は低下し、機械による測定によって真理が成立するようになっていった。

オ 十七世紀に科学的探究が始まったが、当初その中心であった貴族は実験に多くの時間をかけることでその信頼性を保証していたが、次第に科学探究の中心が一般庶民しよみんに変わっていくにつれて時間をかけずに済む、機械による測定によって真理が成立するようになっていった。

問四 傍線部2「リンネや啓蒙期の学者たちが依拠した規範」とあるが、これはどのようなものか。その説明として誤っているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神が創造した自然が表すはずの美しい理念。

イ 神の意図が忠実に表現された自然。

ウ 現代では「捏造」とも捉えられかねない自然の理想形。

エ 神によって創造された自然の理想的な姿。

オ 偶然による誤差や奇形などをも含む具体的な自然そのもの。

問五 傍線部3「機械による客観的な測定はこの文脈のなかで生まれたものである」とあるが、「この文脈」とはどういうこ

とか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然の図像化において、自然のサンプルを忠実に描くのではなく、神が創造した自然の理念を描くことが求められた一定の時期を経て、神の絶対性が揺らいでいく中で、自然のありのままの姿を正確に捉える客観性こそが学問の真理であると考えられるようになった。

イ 自然の図像化において、ありのままの自然を模写するのではなく、その理想形を描くことが求められた一定の時期を経て、神の権威が弱くなる中で、自然の本性を確実に定着させた客観性こそが学問の真理であると考えられるようになった。

ウ 自然の図像化において、偶然による誤差や奇形に満ちた具体的自然ではなく、理想的な図像を描くことが求められた一定の時期を経て、神への信頼が低下していく中で、自然の理念を正確に具現化した客観性こそが学問の真理であると考えられるようになった。

エ 自然の図像化において、一般的な自然ではなく、目の前にあるありのままの自然を描くことが求められた一定の時期を経て、神の権威が失墜していくのに呼応するように、自然そのものを忠実に把握する客観性こそが学問の真理であると考えられるようになった。

オ 自然の図像化において、誤差や奇形を含む醜い自然ではなく、美しい理想的な自然を描くことが求められた一定の時期を経て、神の権威が弱まって行く中で、人間の知覚によって把握される自然のリアルな質感である客観性こそが学問の真理であると考えられるようになった。

問六 傍線部 4 「一九世紀末から客観性はさらなる段階へと進む」とあるが、「客観性」の「さらなる段階」とはどのようなものか。空欄

X

 ・

Y

 に、【条件】に従って適当な言葉を補い、【説明文】を完成させなさい。

【説明文】

個々の対象の性質を

X

 が客観性だという考え方から、

Y

 が客観性だという考え方に変わっていった。

【条件】

X

 Ⅱ「……によって……すること」という形式で、二十字以内（句読点等を含む）の言葉で補うこと。

Y

 Ⅱ「……に……を見出すこと」という形式で、二十字以内（句読点等を含む）の言葉で補うこと。

〈下書き用〉

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問七 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から**二つ**選び、記号で答えなさい。ただし、解答の順序は問わない。

ア 写真が、人間の曖昧^{あいまい}な判断に左右されないありのままの表象をつくり出す機械であることから、機械的客観性が追求されるようになった。

イ ガリレオやロバート・ボイルが測定によって客観性を追求したのに対して、ゴットロープ・フレーゲやマックスウェルは論理式によって客観性を追求した。

ウ 自然の科学的真理は、時代・地域によらず、自然それ自体のありのままの姿をどのように把握するのかという点で一貫していた。

エ 客観性を追求しようとする人間の意志は、時代が移り変わっても不変だが、客観性の内容は時代によって変化している。

オ 自然科学において完全な客観性が実現したとき、自然そのものが持つリアルな質感や生命力は人間が見出しがたいものになってしまった。

□ 華族（＝貴族）のM侯爵^{こうしやく}は、高貴な地位なのに親しみやすい人柄であると、「僕」たち新聞記者の間で評判になっている。写真師の杉浦は「僕」と同じ新聞社に勤めているが、お調子者な人柄で、先日M侯爵邸で豪華な食事をご馳走になったことを、「僕」に誇らしげに語っている。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「侯爵は、つい家令^{けいし}にいつておかなくて悪かった、といって、すぐ食堂へ案内してくれたよ。僕と侯爵と差し向かいさ。フランス料理は、材料の関係でできないから、すっぱんを食わせようというんだ。何でも、土浦から送ってきたすっぱんを二匹料理したそうで、一匹が十三円もするそうだよ」

「素敵だね」

と、僕もつい感嘆しましたが、大名華族の筆頭といってもよいM侯爵、そのうえ国家の重職にあるM侯爵が、杉浦のような小僧っ子の写真師、爪の先をいつも薬品で樺色^{かば}にしている薄汚い写真師と、快く食卓を共にすることにもかなり感嘆しました。平民的だとか、^a 如才^{ずさい}ないなどという噂が、決して嘘ではないことを知りました。それにもう一つ、感心したのは杉浦の度胸でした。汚い背広を着て、侯爵家の表玄関から堂々と、家令をおどかしながら、御馳走になりに行く杉浦の度胸です。すっぱん料理と、侯爵の態度と杉浦の度胸とに、少しずつ感心して、僕は杉浦の話を愉快に聞いたのです。やはり杉浦の無邪気な一本調子の無作法なところが、かえって侯爵などという社会上の慣習に包まれている人には、気に入るに違いない。家令とか家職とか、その周囲の人たちが、社会上の虚礼^{とろ}に囚われて、遠い所からのみ、ものをいつている時に、杉浦のような一本調子の^b 向こう見ず^{ひょうきん}の剽軽^{ひょうけい}者が、ぐんぐん突っ込んで行くところが、かえってあつた人たちの気に入るのに違いない。^(注2) 以前のT伯の場合だってそうだ。今度のM侯爵の場合だって、そうだ。杉浦の江戸っ子的な無作法な無邪気な態度が、気に入るに違いない、僕はこんなに思っていたのです。

そのうちに、僕も何かの機会で、M侯爵に会ってみたいと思っていました。いったい僕などは、もう三年も社にいるのですから、侯爵くらい有名な人には、一度くらいは是非会っていなければならぬはずですが、つかえちがって、一度も会った

ことがなかったのです。

ところが、去年の末でした。M侯爵などの首唱^(注3)で、ご存じの労資協調会というのが、創立されることになりました。その時です。部長は、

「どうです。M侯爵に会ってくれませんか。あの人が労資問題をどう考えているかもちよつと面白いことですから」

と、僕にいいました。僕は、杉浦のいわゆるM侯爵に会えるのが、ちよつと興味がありましたから、快く引受けました。

「写真はそうですね。いりませんかね」

と、いうと部長は笑いながら、

「ああ、杉浦君がいたら、すぐ飛んで行くんだけど、今ちよつと本郷の方へ行っていますから、帰ったら後から別にやりましょう」

といいました。

「ああ、そうですか」

といって、僕は早速一人で出かけました。¹ 杉浦と一緒にでないことは、ちよつと残念でもあり、心細く思いました。が、杉浦からかねがねきいているので、玄関払いか居留守などを使われる心配がないと思いましたが、非常に安易な心持で出かけたのです。

社を出る前に、給仕に電話で侯爵邸に問い合わせると、華族会館に在ることでした。僕は電車に乗らずに歩いて行きました。

華族会館の玄関で、給仕に取次ぎを頼むと、金ボタンの制服を着た給仕は、会社や銀行のそれとは違って、恭しくこちらの名刺を持って去りました。

しばらくすると、つかつかと玄関へ現れたのは、写真や他所^{よそ}目には、たびたび見たことのあるM侯爵のにこにこした丸顔です。僕を見ると軽く会釈して、

「やあ！ 君が佐藤君ですか。どこかで会ったことがあるようだね。さあ上りたまえ」

といったまま、先に立って案内してくれるのです。噂に違わないと思いました。大臣だとか大実業家だとか華族などになると、誰も彼もこう手軽には出て来ないのです。給仕に名刺を取次がしても、何だかだと二、三回も給仕の往復があつた後、やっと応接室に通されるにしたところが、相手の出て来るのには、早くて十分、遅ければ一時間以上もかかる時があるのです。M侯爵の如く、自身さつさと出てくれるのは、新聞記者からいえば、理想的な人間です。

侯爵は、僕に椅子を与えながら、自分は座らないで、燃えさかるストーブを背にして立ちながら、

「よつぽど寒くなつたね。だいぶ押しつまって来たね。今日あたりは何も用はなさそうだが、それとも何かニュースがあるかね」

と、気軽に話の緒いとぐちを向うから切ってくれました。

僕は、こういう人たちと会う時に、今でも抜け切れない妙な重くるしい圧迫を少しも感ぜずに、自由に、予期した以上の材料を取ることができました。僕は、杉浦を通じて知った時以上に、M侯爵に感心しました。何という気軽な、いい人だろうと思いました。ところがちょうどその時です。用談が済んでしまうと、侯爵は急に話題を変えながら、

「そうそう君の社だったね。あの若い写真師がいるのは」

と、いいました。ああ杉浦のことをいうのだな、きつと杉浦を褒めるのだなと思ひながら、

2 「そうです、あのまだ二十ぐらいの。杉浦です」

といったのです。すると、

「ああ杉浦というのかね。ありや君、うるさくていかんよ」

と、侯爵はちよつと眉をひそめるようにしたのです。僕はよそごとながら胸がどきつとしたように思つたのです。 3

は、侯爵の言葉が、全く意外な思いもかけぬ意味を持っていたからです。

「へえ！ あれが、杉浦が」

僕に

と、僕はおどろいて侯爵の顔を見直しました。侯爵の温和な表情が、ちよつと濁っているように思いました。

「ありやいかんよ。この間も僕のところへ来てね。御馳走をしてくれとか何とかいってね。家令が取次がないというと、免職させるとか何とかいって家令を脅迫したそうだがね。ありやいかんね。社へ帰ったら、そういっておいてくれないかね」

と、侯爵は真面目にいいつつけるのです。僕はそれを聞くと何だかいたたまれないような気がして、早々と暇いとまを告げて帰って来ましたが、侯爵の言葉は、僕には軽いけれども、ちよつと不愉快な激動を与えたのです。杉浦がいつていることと、まるきり反対なのです。杉浦の言葉に従えば、侯爵ぐらい杉浦に好意を持っている人は、ちよつとなさそうに思われるのです。侯爵に従えば、杉浦は侯爵にとつてうるさいやがられ者なのです。こうした食い違いの原因がどこにあるにしろ、そのこと自身は僕にとつて、かなり不愉快なことでした。甲は乙から好意を持たれていると思つてゐる、ところが、その実は乙は甲をいやがつてゐる。それは侯爵と写真師といったような、まるきり階級の違った二人の間の関係でなくて、どんな二人の人間の間関係であるとしても、不快ないやな関係であると思ひました。

僕は、そうした関係の存在自身からでさえ、心を傷つけられました。かなり不快でした。それがとにかく自分の同僚と、自分が少しでも尊敬していた人との間に存在しているのですから、いつそう不快なわけです。が、いったい責任はどちらにあるのだろうと思つてみました。やっぱり、杉浦のやつやつの自惚れだ。あいつは、いつか丁伯が時計をくれそうだななどと自惚れてゐたが、とうとう実現しなかつたではないか。M侯爵があいつに好意を示したなどというのは、皆あいつの自惚れで、あいつに示すくらいの如才なさは、誰にでも示されているのだ。それを自分にばかり示されるものだと思つてゐるのは、あいつの自惚れに違ひない。こう思うと、M侯爵には少しも責任がなく、杉浦にだけ責任があるように思われるのです。が、そうすればすつぽん料理の一件は、どうなるだろうかと思ひました。侯爵は、杉浦が家令を威嚇して御馳走の強制をやつたようにいつてゐる。あれから見れば、侯爵が杉浦に御馳走する意志がなかつたのは明らかである。が、それならば杉浦が突然晩飯時に押しかけて行つて、御馳走を強制したのだろうか。そうとも僕には思われなひのです。いくら杉浦が図々しくても、御馳走の強制に押しかけるほど図々しくないことは、同僚甲斐だけに、あいつのために信じてやりたいのです。すると結局、侯爵に御馳走す

る意志が本当にあつたかないかは別問題として、口先で「フランス料理を食わせてやる」といったことだけは、本当のように思われるのです。それが冗談半分であつたか、お世辞であつたか、捨て台詞であつたか、とにかく侯爵が「フランス料理を食わせてやる。金曜においで」といったことだけは、本当のように僕には思われるのです。

その侯爵の冗談に、愛嬌に、気の早い一本調子の杉浦が、有無をいわず、食いついたのです。世の中に、お世辞食いというやつがありますが、杉浦のやつは全くそれを文字通りに実行したのです。僕は、そう考えてくると、お世辞にいったことを真に受けて、時刻も違えず、家令を脅迫してまで、まかり出た杉浦を相手に、侯爵が否応なしに、おそらく眉をひそめながら、すっぱん料理に箸をつける光景が、滑稽なカリカチュアのように頭の中に浮んできました。

そう考えてくると、またこうも考えられるのです。侯爵は、平民的な侯爵は、侯爵に追従する人々に、きっと杉浦にいったようなお世辞をいつているに違いないと思われるのです。

「どうだい、今度の日曜あたり、ちつとやって来ないかね、うまいすっぱんが来ているのだがね」

こうしたお言葉だけをいただくと、周囲の人々は恐縮してありがたがるのだらうと思うのです。言葉の実行などは問題じゃないのです。ただそうした言葉だけを、ありがたく頂戴して引き下るのだらうと思うのです。こうした連中に接しているうちに、侯爵もついついそうした言葉だけを振りまくのに馴れてしまったのだと思うのです。「フランス料理を食いに来い」というと、皆ありがたがりながら、そのくせ誰も来ないので、M侯爵もいつの間にか、言葉だけで——実行の意志のない言葉だけで人を欣よろこばせるようになったのではないかと思うのです。

ところが、⁴ 相手が悪かつたのです。むきな正直者の杉浦は、侯爵がどんなに名望があろうとも、地位が高かろうとも、その言葉だけでは満足しなかつたのです。やっぱりフランス料理を本当に食いたかつたのです。

ここまで申したならば、その時の僕の心持が、どちらに団扇うちわを揚げたかは、お分かりになるだらうと思います。侯爵とか写真師とかいう、そういう社会上の区別をすっかり洗ってみると、相手の言葉を文字通りに信ずるということは、人間として尊いことではないかと思うのです。心にもないことを相手にいい、いったことに対して責任を持たない者よりは、人間として尊

くはないかと思われるのです。僕は、そんなに思いながら、社に帰って来ました。が、たとえ根本的にはどちらに責任があるにしろ、M侯爵が杉浦を嫌っている以上、何とか婉曲に、杉浦にあまり侯爵のところへ行かないように忠告してやろうと思っていたのです。

が、社に帰ってみると、杉浦はカメラ入りのズックを肩にかけながら、ちょうど出かけようとしているところでした。僕の顔を見ると、

「やあ！ M侯爵に会いに行ってたって。僕はこれから写真を撮りに行くんだ。どうだい！ いい人だろう。あんないい人はないぜ。華族会館にいるんだって。じゃすぐ撮って来よう」

と、いい捨てるどンドン音をさせながら、勢いよく階段を駆け降りて行きました。

M侯爵に嫌われているなどは夢にも思わず、よろこび勇んで、M侯爵を撮りに行く杉浦の後姿を見てみると、妙に可哀そうに思いました。

杉浦が行けば、またきつとM侯爵は、「うるさい」などといった口をぬぐって、如才のない言葉を掛けながら、気軽にカメラの前に立つのだと思うと、僕は、今までかなり尊敬していたM侯爵が何だかいやになりました。

(菊池寛きくちかん「M侯爵と写真師」による)

(注) 1 家令——皇族や華族の家で、使用人を管理する立場の人。後出の「家職」も同様の意味。M侯爵の発言は、杉浦がM侯爵の邸宅を訪ねた際、家令が杉浦を追い返そうとしたことを踏まえている。杉浦は家令に対し、M侯爵に取り次ぐよう威圧的に迫った。

2 以前のT伯の場合——気難しい人物であったが、杉浦はよく写真を撮らせてもらっていた。

3 首唱——先に立って提唱すること。

4 カリカチュア——特徴を際立たせるために誇張した人物画。

問一 二重線部 a 「如才ない」・ b 「向こう見ず」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 如才ない

- ア 羽振りがいい
イ 愛想がいい
ウ 懐が深い
エ 見栄^{みば}えがする
オ 思慮が深い

b 向こう見ず

- ア 気が置けない
イ 意気地がない
ウ 形式張らない
エ 利害にとらわれない
オ 後先を考えない

問二 傍線部1「杉浦と一緒にでないことは、ちょっと残念でもあり、心細く思いました」とあるが、この時の「僕」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 杉浦からはM侯爵がいかに親しみやすい人物か聞かされているものの、お調子者の杉浦の言葉なので、本心としては信じ切れずに不安が残っており、また杉浦を通じてM侯爵と個人的に親しくなる機会も失って残念にも思っている。

イ 杉浦はその独特な性格でM侯爵に気に入られているものの、彼とは全く気質の異なる自分に対してもM侯爵が好意的に接してくれるという保証はなく、頼みの綱である杉浦が取材の場に同席できないことを、寂しく無念に感じている。

ウ 杉浦から聞くM侯爵の人柄から想像するに、初対面の自分であっても邪険な扱いを受けはしないと気楽に構えているものの、やはり一抹の不安があり、また杉浦とM侯爵の関係をひと目確認できないことを心残りにも感じている。

エ 杉浦の助言によれば、M侯爵には臆せずにも多少無礼な振る舞いをするので、かえって親しくなれるとのことであるが、それを鵜呑みにすることもできず、自分だけでM侯爵の取材を行うことが不安で、神経質になっている。

オ 杉浦の言葉によれば、M侯爵は誰にでも分け隔てなく接してくれる度量の広い人物であり、初対面でも安心して取材はあるが、取材が上手くいかない場合を考えると不安も大きく、部長の配慮の無さを口惜しく思っている。

問三 傍線部2 「『そうです、あのまだ二十ぐらいの。杉浦です』」とあるが、このように言う時の「僕」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア M侯爵の気取りのない人柄が、杉浦の語る通り理想的なものであったことに感動していたが、取材の用談が終わった途端に横柄な口調に転じたことに違和感を覚え、今から杉浦を貶めるような話題へと転じないことを願っている。

イ M侯爵の完璧に行き届いた対応に深く感じ入り、理想的な人物としてのイメージを膨らませていたところ、不意に異なる話題に転じ、たった今自らが作り上げた理想像を壊さない内容であってほしいと、期待と不安が入り交じっている。

ウ M侯爵への取材で、政治家や華族に特有の重圧を感じずに想定以上の材料を得ることができたことに感謝の念を抱いていたところ、M侯爵が親しくしているはずの杉浦の名前すら覚えていないと気づき、大きな失望感を抱いている。

エ M侯爵と直接対面し、杉浦から聞いていた話以上に気さくな人柄に心を打たれていたところ、M侯爵の口から杉浦の話題が出たことで、思っていた通りM侯爵が無鉄砲な杉浦を高く評価する言葉が聞けることを、心待ちにしている。

オ M侯爵の、格下の自分にさえ気を使わせない人柄に感心し、今後懇意な関係を築けることを願っていたところ、新たな話題が杉浦のことであると確信し、ひとかどの人物に高く買われている杉浦に対し、羨望と嫉妬の念を抱いている。

問四 傍線部3「僕には、侯爵の言葉が、全く意外な思いもかけぬ意味を持っていたからです」とあるが、「全く意外な思い

もかけぬ意味を持っていた」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ある人は相手のことを良く思っていないのに、相手は勘違いしてその人に評価されていると信じ込んでいる状況は、その食い違いの原因がわからない点で、双方と関わりのある自分にとっては悩ましいものであったということ。

イ ある人が相手に好意を持たれていると思い込んでいるのに、実は相手はその人を嫌っているという関係性は、個別の事情がどうであれ、直接的な影響のない自分にとっても、不愉快極まりないものであったということ。

ウ ある人が相手から好意を持たれていると思っているのに、相手の思いは真逆で、その人のことを悪く言うという状況は、双方と関わりのある自分でもあまり関心を抱けず、その話題に割く時間が不毛に思われたということ。

エ ある人が相手のことを嫌ってそれを言動の端々に表しているのに、相手はそれを微塵^{みじん}も察知せず、むしろ好かれていると勘違いしている状況は、事実を遠回しに伝えねばならない自分には、気の重いものであったということ。

オ ある人は相手に対して強く好意を抱いているのに、相手はその好意を意にも介さず、その人のことを毛嫌いしているという関係性は、双方の階級が大きく異なることも相まって、不快なものだと痛感したということ。

問六 本文の内容と表現に関する説明として**明らかに誤りを含むもの**を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一貫して「僕」の視点で描かれた文章であるため、M侯爵と杉浦の間で実際に交わされたやり取りの詳細や、その中の心情の変化は、「僕」に対して語られた言葉を手がかりに想像する他はないものとなっている。

イ M侯爵だけでなくT伯という人物の名が登場することで、社会的に高貴な地位の人物は杉浦のような無作法な人間を好意的に受け止めるという推測が、M侯爵の本音を知るまでの「僕」にとって真実味のあるものとなっている。

ウ M侯爵が杉浦のことを口にした後の、「侯爵の温和な表情が、ちよつと濁っているように思いました」という叙述は、「僕」にとってM侯爵の印象が悪化したことを、間接的に表現したものとなっている。

エ M侯爵の言葉を真に受けた杉浦を、「滑稽なカリカチュアのように」と表す比喻は、お世辞を理解せず鵜呑みにする杉浦の無様さと共に、意図的に杉浦の心をもてあそぶM侯爵の狡猾さが読み取れるものとなっている。

オ 結末部で、M侯爵の本音も知らず、喜び勇んで面会に出かける杉浦の姿が悲哀を帯びて描かれることで、他者の思いを踏みにじる人間の愚かさが、読者に深く印象づけられるものとなっている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今はむかし、ある人牛を売りけるに、買主いふやう、「この牛は、力も強く病氣やまひけもなきか」といへば、売主答へていはく、「なかなか力の強く、しかも息災な。^(注1)大坂陣では佐奈田ぢやと思へ^(注2)」といふ。「1 さらば^(注3)」とて買い取る。五月になりて、この牛にからすきをかけて田をすかするに、一向弱うて田をもすかず、からすきは一足もひかず。ややもすれば人を見てはかけ出でて、角にて、^(注4)かけんかけんとするほどに、「2 何の役にも立たぬ牛なり。さてさて 3 憎い事をいふて買はせた。大坂陣では佐奈田ぢやと申したほどに、さこそ強からうと思ふたれば、からすきは一足もひかず、そのくせに人を見てはかけんとする」と腹立ちて居る^(注5)。ある時かの売主に逢ふて、「其方^{そなた}はとどかぬ嘘について、人をばかけて、からすきをばひかぬ牛を、佐奈田ぢやといふて売りつけられた」といへば、売主答へていはく、「さうであらう。からすきは一足もひくまい。人を見てはかけんとする事は定であらう。4 さればこそ佐奈田とは申しつれ。大坂陣で佐奈田は、たびたびかけこそしたれ、一足もひいたことはなかつた。その牛もひかぬによりて佐奈田ぢや」といふた。

(『浮世物語』による)

- (注) 1 大坂陣——豊臣軍が守る大坂城を徳川軍が攻撃し、豊臣軍が敗れた戦い。
- 2 佐奈田——真田幸村のこと。豊臣軍の軍師として勇ましく活躍した武将。
- 3 からすきをかけて田をすかする——牛馬にからすきという農具を引かせて田畑を耕すこと。
- 4 かけんかけんとする——突こう突こうとする。

問一 波線部「いふやう」を、現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部1「さらば」とは、「そうであるならば」という意味である。「さら（そうである）」の内容を、傍線部1より後の本文中から四字（句読点等を含む）で抜き出しなさい。

問三 傍線部2「何の役にも立たぬ」とあるが、買主はどのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 力は強いのだが、上手に「からすき」を引くことができず、田を耕すことができない、ということ。

イ 時に人さえ追いかけるうえ、一歩も「からすき」を引くことができず、田を耕すことができない、ということ。

ウ 病気になるがちで、「からすき」を引くことができず、田を耕すことができない、ということ。

エ 角で地面を突こう突こうとするばかりで、ともに田を耕すことができない、ということ。

オ 人が近くにいると気になってしまい、追いかけるのを止めないの、田を耕すことができない、ということ。

問四 傍線部3「憎い事」とあるが、なぜ買主は「憎い」と思っているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 売主が、田を耕すことができない牛を真田幸村にたとえることで、その名声を貶め^{おとし}たから。

イ 売主が、人を追いかけて突いて回る凶暴な牛を、買主の言うことをよく聞く牛だと偽って売ったから。

ウ 売主が、まったく「からすき」を引くことができない牛を、真田幸村のようだと言って売ったから。

エ 確かに勇敢な牛だが、「大坂の陣の真田幸村のようだ」という売主の言葉はあまりに大げさだったから。

オ 病気で「からすき」さえ引くことができない牛なのに、売主が強くて丈夫だと偽って売ったから。

問五 傍線部 4 「さればこそ佐奈田とは申しつれ」とあるが、なぜ売主はこのように言ったのか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大坂陣で活躍した真田幸村が時に主君の命令に従わないことがあったように、その牛も主人である人間の命令に従わないことがあるから。

イ 大坂陣で真田幸村が敵から一步も退くことがなかったように、その牛も「からすき」を引こうとしないから。

ウ 大坂陣で勝利を挙げた真田幸村がその力を隠して無能さを装っていたように、一向に働かないその牛も人間を欺いているだけと思われたから。

エ 大坂陣で真田幸村が格上の敵に対しても勇敢に立ち向かったように、その牛も主人である人間に対して立ち向かうとするから。

オ 大坂陣で危険な敵地に送り込まれた真田幸村のように、その牛も始終働くことを強いられる劣悪な環境に置かれているから。

問六 破線部「人を見てはかけんとする事は定であらう」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 力の強い牛が、自分よりも弱い人間に従おうとしないのは、仕方ないということ。

イ 「からすき」を引く力もない牛が、人に危害を加えることは、あり得ないということ。

ウ 健康で田畑を耕せる牛が、安値で取引されるような話は、疑わしいということ。

エ 興奮した牛が、人を追いかけて攻撃してしまうのを責めるのは、気の毒だということ。

オ 退かない牛が、前進ばかりして人を突こうとするのは、当たり前だということ。

問題は以上です。

受 験 番 号

氏 名

得 点

問

a

b

c

d

e

問二

問三

問
四

問五

問六

X

Y

問七

二

問
一

a

b

問
二

問三

問
四

問五

X

Y

問六

三

問一

問
一
一

問三

問
四

問五

問六